



遣伯使見聞録



Eu quero ir para o Japão (日本に行きたいです)

ブラジルの子どもたちに「日本に行きたいですか?」と聞くと、みんな指を一本上げて「Sim(シー) : はい!」と言います。「でも、言葉はわからないし、勉強いっぱいやるんだよ」と言う。「観光にね」と答えます。やっぱりそうなんだなと思いました。

クリチバやマリンガで聞いた話をまとめてトピック的に紹介(その3)します。

【トピック話】その3 ③日本語教育の話



ある涼しい朝、廊下の向こうからはきはきとした日本語を話す男の子の声が聞こえてきました。マリンガにあるACEMA(マリンガ日本文化体育協会)の日本語学校を訪問した時のことです。その男の子は、週末に行われる日本語スピーチコンテストに向けて朝からスピーチの練習をしていたのです。先生といっしょに作った日本語の作文をしっかりと覚え、ていねいに暗唱していました。自分が「とても素敵な話だね。聞く人が想像する時間(余韻)を与えるために、もう少し間(ま)を空けるといいよ」とアドバイスしたら、きれいな日本語で「ありがとうございます。がんばります!」と言ってくれました。

ACEMAの日本語学校 先生たちの話

- ・ここには、園児児童生徒成人(3~75歳)110人が通い、5人の先生が日本語を教えている。日本語学校は大きな町にしかない。生徒は85%日本人、10%ハーフ、5%ブラジル人。
- ・学校運営は厳しい。運営費は生徒の学費のみで市からの援助はない。他の習い事(英語、公文、スポーツ)で忙しいと言って生徒が減った。2008年に佐原市長が来て習字道具を寄贈してくれた。
- ・ここ学びに来るのは、日本帰りの生徒が日本語を忘れないようにするため、日本に行くため、日本語能力試験に合格するため、漫画アニメを読んだり書いたりするためと、目的がはっきりしているから上達がはやい。
- ・仕事の都合で日本に行くという数か月前にいきなりここに来るのでは、十分な指導ができない。
- ・日本語は難しいが、ポルトガル語は半年でマスターできる。日本語は使わないと忘れてしまう。
- ・保護者には日本に行く前に、自分だけでなく子どもにとっての目的をもつこと、それを子どもに伝えることが大事。そして、日本の生活や学校のシステムを教えることが大事。



日本台ブラジルに住むことはピンチ?チャンス?どちらなのだろうか?・・・親が自分の仕事のことだけでなく、「日本の高校を卒業するまで日本で過ごす」など、自分の子の将来を具体的にイメージしていれば、子どもはそれに向かって努力し両方の言葉が話せるようになり、生活文化を知り、バイリンガルとして活躍することもできます。しかし、親に具体的なイメージがないと、子どもはめざすものがなくて楽な方へ流れてしまい、両方中途半端になってしまいます。

また、日本語は語彙が豊富で繊細だから、言葉にいろんな意味や気持ちが入っているので、通訳や教えることが難しいそうです。そんな細かな表現まで可能な素晴らしい日本語を大事に使わないといけななと思いました。

おう!ジャポネーゼ! ~ナッツコラム~

「昔は『おう!ジャポネーゼ(あっ日本人だ)』と言われれば、バカにされていた。今は『おう!ジャポネーゼ』と言われれば、褒められている」とナッツと知り合いになった日系人のお年寄りが言っていたね。日本人の礼儀正しさ、勤勉さ、やさしさなどから、ブラジル人にとって日本人の印象は変わったようだ。リオデジャネイロオリンピックのとき試合終了後、日本人応援団がスタジアムのごみ拾いをしていたのが世界中で話題になったね。日本食は美味しい、日本の機械は性能がいいというのも世界に知られている。東日本大震災でも、我慢強く復興に取り組んだ日本人の姿は世界の人々の心を打ったね。

そんな話を聞いてから、「おう!ジャポネーゼ」って言われると、ナッツはうれしくて、ちょっと誇らしく思っていたでしょ…。(ナッツの腕時計より)

